



# まちな史跡めぐり



国会図書館所蔵資料の閲覧  
(9)

町文化財専門委員  
石瀧豊美

国立国会図書館デジタル  
コレクションで、「糟屋郡須  
恵村」を検索した結果を報告  
します。今回は711件が  
ヒットしました。ピークだっ  
た741件から減りました  
が、原因は不明です。

『京都医学雑誌』7巻1号  
(京都医学会、1910(明治  
43)年1月)掲載、「京都医学  
会広告」内の、  
○会員異動左ノ如シ  
移転者  
福岡県糟屋郡須恵村(大)字

上須恵 田原純一君  
がありました。大は石瀧が  
補いました。

『京都医事衛生誌』188号  
(京都医事衛生社、1909  
(明治42)年11月)から田原純  
一は京都医科大学の卒業生  
であることが分かります。  
●新医学士 京都医科大学  
本年度卒業生左記七十五  
名に去る十三日仮卒業証  
書を授与せり。因に受験  
生中不合格者は僅かに一  
名なりしと。  
卒業生の中に「田原純一」

の名があります。京都医科  
大学は正確には京都帝国大  
学京都医科大学(現在の京都  
大学医学部)、他に京都帝国  
大学福岡医科大学があり、こ  
ちらは後に九州帝国大学医  
学部を経て、九州大学医学部  
になりました。京都帝国大  
学福岡医科大学から九州帝  
国大学医科大学への変更は  
1911(明治44)年4月で  
す。

『京都医事衛生誌』189  
号(1909(明治42)年12  
月)には卒業生の就職先の記  
事がありました。

●新医学士の落着先 既記  
京都医科大学新卒業生の  
専攻学科及び就職先は左  
の如し。  
学科は外科、内科、婦人科、  
小児科、皮膚科、眼科、耳鼻  
科、病理学、解剖学、医化学、  
衛生細菌学のほか、軍医、一  
年志願兵の分類もあり、眼科  
に「田原純一(福岡)」と書か  
れています。

『第五高等学校一覽』  
(1908(明治41)年12

月)の

第十四回(明治三十八年  
七月)卒業百八十一人  
(略)

第三部医科三十五人

の中に「京医 田原純一 福  
岡士」の名がありました。田  
原純一は福岡県の士族で京  
都医科大学に進学したとい  
う意味のようです。この頃  
は卒業生名簿に華族・士族・  
平民という族籍の記載があ  
りました。

『九州帝国大学医学部  
二十五年史』(九州帝国大学  
医学部事務所、1928(昭  
和3)年10月)にも次の記事  
がありました。

(三)眼科教室職員医員  
研究員の氏名録

眼科創立以来今日迄眼科教  
室の職員乃至医員たりし人  
の氏名左の如し。

この在籍者名簿に田原純  
一の名がありました。田原  
氏は第五高等学校(現在の熊  
本大学)を経て京都医科大学  
へと進み、九州帝国大学医学  
部に医員もしくは研究員と

して所属していたというこ  
とのようです。

『東京高等工業学校一覽』  
(1916(大正5)年)に萩  
尾善次郎の名がありました。  
萩尾は海軍炭鉱の功労者と  
して知られています(別に取  
り上げたいと思います)。東  
京高等工業学校は東京職工  
学校を前身とし、現在の東京  
工業大学へとつながります。

附設工業教員養成所の機  
械科卒業生の内、「金工科」の  
最初の卒業生は1896(明  
治29)年。萩尾善次郎の卒業  
は第7回です。記事は福岡  
県平民で、海軍探炭所に就職  
したという意味です。

明治三十五年七月卒業(三  
名)  
海軍探炭所(福岡県糟屋郡須  
恵村) 萩尾善次郎 福岡平  
『児科雑誌』221号(日本  
小児科学会、1918(大正  
7)年10月)の「○入会」の中  
に、  
福岡県糟屋郡須恵村六四〇  
原田勝郎君  
がありました。原田勝郎に

ついではずで何回か名前  
を出しました。

橋本白水『評論 台湾之  
官民』上編・下編(台湾案内  
社、1919(大正8)年9  
月)に帝国製糖の田原哲次郎  
に触れた部分がありますの  
で、以下に引用することに  
します。台湾が日本の植民地  
であった時代(1895年〜  
1945年)のことです。(読  
点を付け、誤字は正しまし  
た)

次郎、彼も亦塩崎主事と同  
じく東大農科の出身也。明  
治二十年三月十五日福岡県  
糟屋郡須恵村に生る。少壯  
農学士として農芸化学に造  
詣深き人。原料、農事、土地、  
調査等の各方面に涉り独特  
の手腕を揮ふて同社の為に  
尽瘁しつゝあるは豈啻に本  
社の裨益のみならんや。

高橋健自『考古学講座 植  
輪及装身具』(雄山閣、発行年  
不明、大正末〜昭和初年)で、  
植木で発掘された勾玉・ガラ  
ス玉に触れています。これ  
は私が全く初耳の情報です。  
第三百三十七図「勾玉の各種  
(四)」(176ページ)  
第三百三十七図解(図の解説  
という意味)

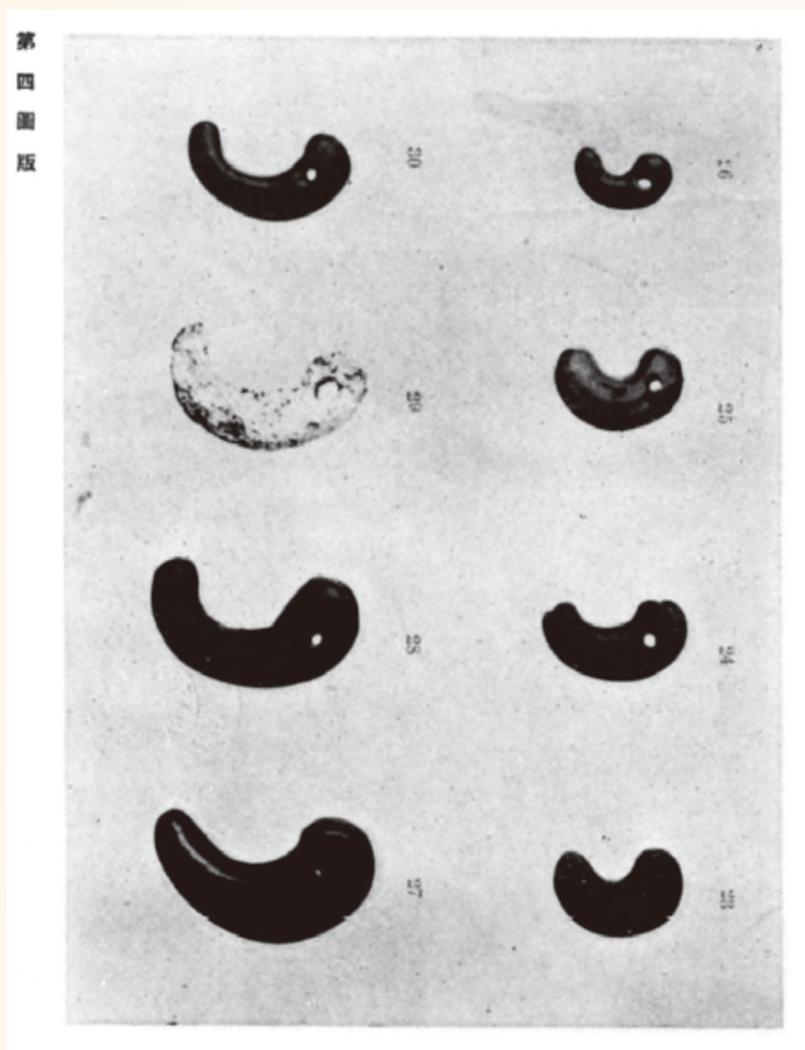
本図のものはすべてガラ  
ス製。  
(23)25、27 略  
26 筑前国糟屋郡須恵村大  
字植木発掘(183ページ)  
(2)小玉 小玉はガラス製の  
ものが多く、そのガラス製の  
ものも、瑠璃色のものが多い  
ので、瑠璃玉とか、瑠璃玉と

か呼ばれることもあるが、一  
般に通ずる名ではない。な  
ほ稀には、蛇紋岩・瑪瑙・蠟  
石・土等のものもある。  
ガラス製のものは、瑠璃色  
が最も多いが、その外に、浅  
青色・緑色・黒色・黄色・褐色  
のものもある。筑前国糟屋  
郡須恵村大字植木発掘のガ

ラス製のものには、金箔を  
押したものもある。(206  
ページ)  
『東京帝室博物館歴史部  
第二区列品玉類目録』(東京  
帝室博物館、1926(昭和  
元年)に記載がありました  
(国立国会図書館デジタルコ  
レクション) <https://dl.ndl.>

go.jp/pid/1077055)。東  
京帝室博物館は現在の東京  
国立博物館です。

第四図版  
二六 (八七二七) 筑前国  
糟屋郡須恵村大字植木発掘  
瑠璃製勾玉



第四図版の26は右上の分